

敦煌出土の地論宗諸文献

石井公成

金沢文庫保管の称名寺依託本、三藏仏陀撰『華嚴經兩卷旨帰』については、高峯了州氏が五〇年以上前に簡単な報告をされており、教理の素朴さから見ておそらく『十地經論』に対する研究が盛んになる前の書物であって、初期地論宗の華嚴經觀を伝える貴重なものと述べておられる。⁽¹⁾しかし、本書は闍那崛多が五八七年に訳した仏名經典、『十二仏名神呪校量功德除障滅罪經』の冒頭に見える二仏の長大な名前を分解して『華嚴經』の諸品に配当し、仏名の説明を通じて『華嚴經』の意義を説く形式になっているため、隋末ないし唐の初期において仏名信仰の流行という状況の中で成立した文献と考えるべきであらう。ただ、本書には地論宗南道派の祖とされる光統律師慧光の系統の古い教理を伝えていると思われる部分も見えており、形式・内容とも異色なものと言わねばならない。⁽²⁾

この『華嚴經兩卷旨帰』の教判の特色としては、(一)『楞伽經』の宗通・説通説に基づいて華嚴の法門を「通宗」と称

し、『華嚴經』を特に尊重していること、(二)華嚴の法門を頓教と位置づけ「円宗」とも称していること、(三)漸教たる「通教」にすぎぬ『法華經』や『涅槃經』において修行する者は、たとえ三阿僧祇劫の修行が満ちても迴心して通宗である頓教大乘に入れば一番下の位である信位にすぎず、転入しない場合は一闍提であるとまで断言していることが挙げられる。他の大乘法門から華嚴法門への転入という問題は、中国・朝鮮・日本の華嚴宗において激しい論争を招いた問題であるため、『華嚴經兩卷旨帰』は華嚴宗に先行する『華嚴經』至上主義の先驅の一つとみなすことができる。

ここで注目されるのは、通宗・円宗を最上とする『華嚴經兩卷旨帰』の教判は、天台の著作が地論師の主張であるとして紹介し批判している諸教判と共通する部分があることである。智顗は次のように述べている。

六者、仏駄三藏学士光統所弁、四宗判教。一因縁宗。指毘曇六因四縁。二仮名宗。指成論三仮。三誑相宗。指大品三論。四常宗。

指涅槃華嚴等。常住仏性本有湛然也。七者、有師開五宗教。四義不異前。更指華嚴為法界宗。即護身自軌大乘所用也。八者、有人称光統云、四宗有所不収、更開六宗。指法華万善同歸、諸仏法久後、要当説真実、名為真宗。大集染淨俱融、法界円普、名為円宗。余四宗如前。即是耆闍凜師所用。（智顗『法華玄義』卷第十上、大正三三、八〇一中）

法界不独華嚴、円宗不偏指大集。（同、卷第十上、八〇六上）

地人呼華嚴為円宗、法華為不真宗。（智顗『法華文句』卷第九上、大正三四、一二五下）

真宗為通宗者、宗即通真不真。……答曰。楞伽經云、説通教重蒙、宗通教菩薩。故以真宗為通宗也。（智顗『四教義』卷第一、大正四六、七二四下）

通宗たることを誇るこうした教判については、仏陀三蔵を師としたという法標の主張中に見られるほか、敦煌の地論宗文献に数多く見られる。地論宗の教学と言うと、浄影寺慧遠の『大乘義章』『起信論疏』『十地論義記』などの著作を思い浮かべがちだが、慧遠は大乘經典に優劣をつけることを嫌って諸經を等しく尊重しようとしたのに対し、地論宗の他の系統では經典の優劣を論じる種々の教判が主張されていたようである。中でも『大集經』尊重派はかなり有力だったように思われる⁵。たとえば、古泉円順氏によれば五五〇年までに書写されたとされるS六三八八、そして五五二年以後、それも

五五二年から数年後程度に書写されたとされるS六一三Vは、ともに自らの立場を通宗、円宗、円教などと称し、『大集經』を尊重する地論宗文献である。⁵『勝鬘經』の注釈であるS六三八八は、『勝鬘經』こそが「円中の円」、すなわち円教中の円教であると述べているものの、その理由は『勝鬘經』は「大集の流なるが故に」ということであるため、根本にあるのは『大集經』ということになる。実際、S六三八八は、『大集經』は「自体因果」を宗としているとして諸經中で最も高く位置づけている。この「自体因果」とは、慧光以来の地論宗の伝統的な概念であって華嚴宗になっても智儼の初期の著作の中で用いられているものだが、本来は『華嚴經』の性起品や入法界品における不増不減の因果のあり方を示す概念である。おそらく、『大集經』が重視されるようになるにつれて、『大集經』こそが真の自体因果を明かすものとされるようになったのだろう。S六三八八は、一方では「然るに宗は各の三を備う。三者を別たんと欲し、互いに一宗を挙ぐるのみ」と述べ、『涅槃經』『華嚴經』『大集經』はすべて円宗であり、この三經はそれぞれ自類因果・自種因果・自体因果をすべて備えているのであって、どの面が強いかということで『涅槃經』に自類因果を、『華嚴經』に自種因果を、そして『大集經』に自体因果を配当したにすぎないとも説いているが、これは自体因果という概念と『華嚴經』

との結びつきが伝統的に強かったという事情を反映したものであろう。

『涅槃經』と『華嚴經』と『大集經』を円宗とすることは、同じ学系に属するS六一三Vも同様であり、古泉氏がこの二書に見られる主張は天台が批判した地論師の主張であることを指摘されたことの意味は大きい。縁集説および行位説の展開という観点から天台教学と地論宗の教理との比較検討を進めている青木隆氏は、智顗が紹介し批判している地論師の教理は淨影寺慧遠の教理と一致しないことが多いことなどから、智顗に影響を与えたのは法上から慧遠へと至る系統の地論教学ではなく、道憑から靈裕に至る系統の縁集説ではないかと推測されたが、このS六一三Vが道憑の名を挙げて一乗に関する道憑の説を引用し自らの立場としていることは、青木氏の推測を裏付けるものと言えよう。

次に敦煌の地論宗文献の行位説と天台教義との関係を見ておく。S三四四一では、

三乗別教

声聞乘

緣覺乘（辟支仏乗）

菩薩乘

通教一乘

十信菩薩

敦煌出土の地論宗諸文献（石井）

習種性有十住菩薩

性種性有十行菩薩

道種性有十廻向菩薩

聖種性有十地菩薩

十一等覺地

十二妙覺地

通宗大乘

一闍提位

十信心人

習種性位十住菩薩

性種性位十行菩薩

道種性位十廻向菩薩

聖種性位十地菩薩

等覺性位無垢地

妙覺性位仏

という行位説をとっており、『華嚴經兩卷旨歸』と同様、通宗を信じない一闍提の存在に言及しつつ通教から通宗への転入を論じている。そして、十地については、

第三列通教一乘菩薩位地。……初欲喜地。……永斷見地、……。二

離垢地。……斷欲愛住地。三明地。……斷色住地。第四列通宗大

乘入道次第。……三明地。……自前三地、名須陀洹。信忍上品。

四炎地。……三地順忍、名斯陀含。順忍下品。……六現前地。……

…自前六地 是第二依法師。七遠行地。……第三依法師。……第六等覺性位無垢地。……此及法雲是第四依法師。〔『三界図』、S三四四一、敦煌宝蔵二八、四七〇上―四七三上〕と説いているが、これはまさに『四教義』が、

地論師通教判位云、初地断見、二地断欲愛、三地断色愛。地論師通宗判位、有用三地断見、名須陀洹。從四地至六地、名斯陀含。

第二依法師。七地名阿那含。第三依法師。十地等覺名阿羅漢。是第四依法師。（智顗『四教義』卷十、大正四六、七五九中）

と述べている地論師の説とほとんど同じものである。

S三四四一、S二七三四、P二八三二Bなどは、「三界図」ないし「法界図」と称する同類の文献であり、P二八三二Bの場合は末尾に簡単な図が付されている。これらはそれぞれの教判に基づいてこの世界の構造、あるいは地獄や一闍提から等覺・妙覺に至るまでの行位を整理して簡単に説明したのであり、敦煌文献にしばしば見られる「大乘義章」風の綱要書から世界観や行位説の部分だけを抜き出し、増補して単行させたものと考えることができる。こうした敦煌出土の「三界図」の特徴としては、青木氏が地論南道派の教義と推測された縁集説を説いていること、『瓔珞經』を用いて四十二位説を取り込んでいること、別教・通教・通宗という三教判を用い、通宗の最初の部分では通宗を信じない一闍提という位をもうけていること、天台の行位説とは異なるものの別

教から通教への転入と通教から通宗への転入の問題を論じ、また五品弟子という位を設けていることなどが挙げられる。こうした文献の存在は、智顗は地論師の行位説を批判的に取り込みつつ独自の体系を形成したとする青木氏の推測の正しさを証拠づけるものと言えよう。特に、S三四四一の、

世諦……第一義諦……中道一実諦……三諦平等……自体修有

中、若約位判、習種願有為縁集行。性種願無為縁集行。道種願自体縁集行。初地已上、願法界縁集行。全此等覺、願法界无障導行。……仏有三種身。一者、法身仏。已法性為躰、自体縁集為身。二者報身仏。一切種妙智為體、无為縁集為身。三者、応身

仏。以大悲為體、三十二相八十種好有為縁集為身。此三種円融不二、即是法界縁集身也。（『三界図』、S三四四一、敦煌宝蔵二八、四七三下）

という一節などは注目に値する。

「三界図」の類であれ、あるいはS六一三Vのような『大乘義章』の類に属するものであれ、こうした便利な文献は学僧の手控えとして、あるいは初学者のための教科書として、学派の枠を越えて広く読まれたことが想像される。そのように広く流布したからこそ、地論宗南道派の教判に納得できない者たちは、強い反発を示さざるを得なかったのではないだろうか。しかし、華嚴宗の智儼を初めとする反発者たちは、批判しつつも基礎教学としてかなりの部分を地論宗文献から

取り入れていることは見逃せない。敦煌出土の地論宗南道派の文献、特に淨影寺慧遠の系統とは異なる系統の文献を研究することは、地論教学そのものを研究するうえで必要であるばかりでなく、六朝末から隋唐にかけての仏教学全体を明らかにするためにもぎわめて重要な作業となるものと考えられる。

1 高峯了州「金沢文庫華嚴逸書について——報告(二)」、『龍谷学報』第三〇六号、一九三八年。同「華嚴經両卷旨帰について」、『仏教学研究』第三卷第一号、一九三九年三月。ともに『華嚴論集』(一九七六年)に再録。

2 石井「三蔵仏陀撰『華嚴經両卷旨帰』の研究「資料篇」」(『華嚴学研究』第四号、一九九四年)、同「三蔵仏陀撰『華嚴經両卷旨帰』の研究「研究篇」」(『華嚴学研究』第五号、一九九四年刊行予定)参照。

3 新羅見登の『一乗成仏妙義』所引、大正四五、七八五下。

4 敦煌の地論宗文献のうち、『大乗五門十地実相論』(北八三七七「露三四」、北八三七八「騰六」)などは『大集經』こそ十地の実相を明かすものと見ている。石井「新羅華嚴教学の基礎的研究(一)」——『一乘法界図』の成立事情——(『青丘學術論集』第五卷、一九九四年三月刊行予定)参照。

5 古泉円順「敦煌出土仏典注釈書の『円宗』」(『IBU四天王寺国際仏教大学文学部紀要』第十五号、一九八三年三月)。古泉氏は、スタイン文書のうちでこれまで目についた範囲では、「円宗」あるいは「円教」という語が見られるのはS六三八八とS六一三Vのみと述べておられるが、スタイン文書ではこの他、S三四四一やS二七三四などにも見えており、ペリオ文書であれば、P二八三二Bなどにも見えている。

敦煌出土の地論宗諸文献(石井)

6 青木隆「天台行位説形成の問題——五十二位説をめぐる」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊(哲学・史学篇)』第十二集、一九八六年一月)、同「中国地論宗における縁集説の展開」(『フィロソフィア』第七十五号、一九八八年三月)、同「天台行位説の形成に関する考察」(三崎良周編『日本・中国仏教思想とその展開』、一九九二年)。

7 S三四四一については、末尾に付された、三種般若を題材とした応答詩(敦煌宝蔵では「揚州觀禪師遊山偶石室見一女独枕一床贈詩一首」)の問題も含めて、別に論する予定である。

〈キーワード〉『華嚴經両卷旨帰』、『大集經』、通宗、円宗、三界

(早稲田大学非常勤講師)

掲載されなかった諸氏の発表題目(1)

親鸞における現生正定聚思想の成立について

隅倉浩信(龍谷大学大学院)

親鸞の社会的実践

松野純孝(東京大学卒)

道元禪師における本覚思想の特異性

青龍宗二(駒沢大学教授)

『正法眼蔵』の批判の対象(2)

熊本英人(曹洞宗宗学研究所)